

地域における子どもと大人の居場所づくりを目指して

宇都宮大学教育学部 教授

栃木県放課後子どもプラン推進委員会 委員長 陣内 雄次

放課後や週末等に、子どもたちが安全で安心して活動できる居場所を設け、地域の方々の参画を得ながら、子どもたちに勉強やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の取組を実施する「放課後子ども教室推進事業」がスタートして5年になります。その間、各地域では様々な活動が展開され、子どもたちの学習、体験、交流活動の充実が図られてきました。今後は、活動を継続して行っていくために、地域に根ざした教室運営が求められていると言えます。

地域に根ざした教室としていくためには、どのようなことに留意すればよいのでしょうか。まず、教室が展開されている地域性を考慮していくことが重要です。地域の人、自然、施設などといった地域資源をうまくつなげ、活かしていくことで、より地域性のある活動が展開されるようになります。

このような地域資源をつなげる役割を担うのがコーディネーターです。コーディネーターには、コーディネーターとして命を受け、教室に配置されている方もいますが、安全管理員や学習アドバイザーなど、子どもの活動に関わる大人すべてがコーディネーターとしての役割を担うことができます。活動に関わる大人が、子どもと学校、地域を結びつけるという視点をもって、活動内容やアクティビティを考えていくことが大切です。

また、教室にかかわる大人が、自分の住んでいる地域をどんな地域にしたいか、その将来像を描いて共有することも必要です。地域の将来像が描ければ、そこを目指すために子どもにどんな大人に成長してほしいか、そのためにはどんな活動が必要か、どんな人々の参画が必要かなどが自然と見えてくるでしょう。この将来像を共有するために、大人同士が情報交換できる場や、大人同士の横のつながりができる場づくりを意図的に実施していくことも重要となってきます。

さらに、子どもに関わりながら教室を運営することは楽しいことも多いですが、同時に一人ではうまくいかない大変なこともあります。地域の方々や社会教育団体、PTAなど、多くの人々を巻き込みながら活動することで、内容も充実し、スムーズな教室運営につなげていくことができます。

放課後子ども教室は、子どもの学びや体験の場となるだけでなく、実はそこに関わる大人自身が、活動をとおして自ら学び成長できる場となりうるところです。放課後子ども教室が子どもと大人、みんなの居場所となることを願います。